

# 特別支援教育における実践研究のあり方 —研究者はいかに実践研究にかかわるか—

企画者・司会者・話題提供者 司城紀代美（宇都宮大学大学院教育学研究科）  
話題提供者 岡澤慎一（宇都宮大学大学院教育学研究科）  
話題提供者 楠見友輔（東京大学大学院教育学研究科）

KEY WORDS: アクション・リサーチ 質的分析

## 【企画趣旨】

これまで、「特別支援教育における主体的・探究な学習を考える」というテーマで 3 回に渡って自主シンポジウムを行ってきた。その中では、実践者である現職の教員が自分たちの実践をどのように振り返り意味づけしているのかを中心に検討し、実践者の省察の重要性が明らかになった。

一方で、研究者が実践の場で起こる自然な営みを研究の対象とすることの重要性も指摘されてきている。本シンポジウムでは、特別支援教育における子どもたちの主体的・探求的な学習の姿をとらえるために、研究者の実践研究のあり方について改めて考えてみたい。前 3 回のシンポジウム同様、障害の種類や程度、実践の場等にとらわれず、そこに共通する本質的な視点を探究することを目指す。また、本シンポジウムでは、フロアとのやりとりで十分な時間を確保し、実践者、研究者それぞれの立場からの意見交流を図りたい。

## 【話題提供者の趣旨】

### 1 通常の学級において「特別な支援が必要」とされる子どものコミュニケーションの様相（司城）

教室で起こっている事実を意味づけしとらえ直すことにより、異なる視点から子どもたちの学習の姿を見ることは、研究者による実践研究の意義の一つであると考えられる。本話題提供では、通常の学級においてコミュニケーションが苦手とされる子どもたちの問題を、教室特有のコミュニケーションとの関係において検討する。教室場面においては、例えば質問者である教師が自分の知っていることを子どもたちに問うというような通常のコミュニケーションとは異なる様相がみられ、何を話すべきか、どのように話すべきかといった問題において、教室特有の判断が生じる（Cazden, 2001）。さらに、そのような会話のルールは教室の中で教師と子どもたちによってつくりあげられていく流動的なルールであり、個々の教室特有のものであるととらえられる。「特別な支援が必要」とされる子どもと周囲の子どもとの間には、その教室での会話のルールを介して相互作用が生じ、その結果としてさまざまなコミュニケーションの様相があらわれる。そこでどのようなズレが生じ、そのズレがどのように調整されながら教室でのコミュニケーションが成立するのかを検討することで、教室談話研究の知見を手がかりにした特別支援教育研究の可能性について考えたい。

### 2 知的障害生徒の主体性に基づく学習の特徴（楠見）

近年、子どもの主体的学習を重視することの重要性が指摘されているが、子どもの「主体性」とは何を意味するのか。筆者はアメリカを中心に展開されている社会文化的アプローチの「媒介された主体性」の概念から、子どもの主体性を①自身の目標や動機に基づく、②他者に影響を与える、③応答性の自覚を伴うという 3 つの行為に含まれる相

互に関連する性質と定義した（楠見, 2018）。このような視点に基づいて知的障害生徒の主体性に基づく学習を分析した場合、子どもの学習はどのような特徴を持ち、学習をどのような視点や方法によって評価することができるのか。本話題提供では、筆者が発表した知的障害生徒の数学の学習に関する研究をもとに（楠見, 2019）、知的障害生徒の学習過程を質的に分析した結果を報告する。

対象は知的障害特別支援学校 1 年生であり、中度知的障害のある対象生徒を含む 3 名の知的障害生徒と 1 名の担任教師との間で行われた 7 回のお金の支払いに関する授業をビデオカメラで記録した。対象生徒は配られた硬貨を組み合わせて教師が示した 3 桁の値段の商品を支払う課題に取り組んだが、配られた硬貨ではちょうどどの値段を構成することができない場合には一人で課題を解くことは難しく、このような「ちょっと上」の値段を出す課題を、教師や他の生徒との相互行為をしながら取り組んだ。7 回の授業過程で子どもの課題への取り組み方がどのように変化をしたかを微視的に分析した。

### 3 障害の重い子どもの教育や変化・成長に関わる実践研究をめぐって（岡澤）

教育研究は、教育といわれる事象を対象とし、子どもの変化・成長に関わる条件を見出す営みであると考えられる。しかし、子どもとの教育における係わり合いには多種多様な条件が複雑に絡み合っており、係わり合いを検討するにあたってはそれらを全体的かつ総合的にとらえようとするのが重要であることは論を俟たない（岡澤, 2018）。また、子どもと係わり手とが出会い、その各々に「とまどい」や「つまづき」、「とどこおり」が生じている「相互障害状況」（梅津, 1978）が教育における係わり合いの出発状況であり、教育研究はそこからの立ち直りを導く条件を見出す営みであるともいえる。さらに、教育研究はその性質上、統制群を設定した比較研究が困難であり、事例研究やエピソード記述（鯨岡, 1999）の重要性が指摘される。このような考えのもと、これまで筆者は、教育研究の研究者として、様々な条件を有する人との教育における係わり合いの場に自身の身をおき、可能な限り継続的かつ長期的な係わり合いを重ね、「相互障害状況」から立ち直り、そこに関わる人の変化・成長に関与する条件を構成法的に見出す実践研究（アクション・リサーチ）を主な研究方法としてきた。また、筆者が出会い、係わり合いを継続した人の多くは、障害が重いといわれる子どもであり、係わり合いの場は、大学のプレイルームもあれば、子どもが生活する家庭や施設、学校である場合もあった。ここでは、こうした筆者の実践研究の一端を取り上げ、特別支援教育研究における研究者のあり方について検討を重ねたい。

(SHIJO Kiyomi, OKAZAWA Shin-ichi, KUSUMI Yusuke)